

子どもの心の中に絵を描くことについての試み

小学校のスライド式黒板をキャンバスにして

西村 愛子

An Attempt of Drawing Pictures on Children's Heart

on the slide type blackboard of an elementary school

Aiko NISHIMURA

論文要旨

本稿は、作品についてのコンセプトを作品写真とともに解説したものである。本作品タイトルは「根っここのところ」である。絵を通して、「根っこが木を支えている」ということを表現し、見えないうところをみる大切さを子どもたちに伝えることを目的とした。

作品についてのコンセプトを解説するために、まず、旧作である「PREZENT」(2009年)との関係性について述べた。「PREZENT」と「根っここのところ」のコンセプトは逆説的に用いられているが、伝えたい内容の本質は一致している。また、本作品は、チョークで描いた黒板の絵であるため、消えて残らないものであるが、鑑賞者である子どもたちの心の中にその絵が描き込まれることを目指した。そこで、絵の構図、描き方、仕掛けを通して、心の中に絵を描くことを試みた。その方法は、スライド式の黒板を用いて、絵を子どもが動かすことができ、動かすことによって大きなハートの形が隠れていることを発見するという仕掛けであった。その結果、小学生からの感想文から、絵を鑑賞するだけでなく、絵を描く体験をしていることが推察された。従って、チョークで描いた黒板の絵は消えて残らない絵であるが、子どもたちに印象づけ、心の中に絵を描いている可能性があることが示唆された。

キーワード 黒板、絵、小学校

背景

アートに対する定義は人によって異なるかもしれない。わたしにとって、アートとは、ただ目を引くための奇抜なものを作ることではない。もしくはただ美しく精巧な工芸品を作ることもない。わたしにとって、アートとは、何かのメッセージを伝えること。その思いを可視化して、モノを通して見る人に訴えることである。

わたしは、心に浮かんだイメージをすぐに言葉にすることに長けていない。そこで、言葉に

できなかったそのイメージをかたちにして表してきた。そして、またかたちを時間をかけて見ることによって、言葉が少しずつ湧いてくるのである。アート作品を通して自分を知り、その背景を知り、社会を知ることができる。それは、真実・真理を追究し、明らかにしていく試みであるとも言える。

オノ・ヨーコはこのように述べている。

「アートは、自分がきれいだということのみせることじゃなく、コミュニケーションだということ。」¹⁾

オノは、コンセプチャルアートを通して、自分の主張を社会に訴えてきたが、ここでのコミュニケーションとは、様々な悲劇に対して心の重みを少しでも軽くすることを目的としている。

わたしにとって、アートとは、何かのメッセージを伝えることであり、そして、ものごとの真理を追究し、明らかにしていく試みであると述べたが、その目指すものは、人に生きるチカラを与えるものでありたいと望んでいる。

社会においてアートは、1980年代からアートが美術館やギャラリーのホワイトキューブから外へ出て、廃工場や廃校、オフィスやホテルなど、アートと地域と人が共生する試みが展開され続けてきた。その規模は拡大し、近年では、村や島全体を美術館に見立てて、地域活性化事業などとしても貢献している。

アーティストは、単なる自己追求としての表現をするだけでなく、社会とのつながりを意識する表現が求められている。制作活動の場や、発信方法が多様となった現在、鑑賞者との距離を縮め、さらには、鑑賞者を巻き込みながら表現の可能性を探求する。

世界でグラバリゼーションが求められているこれからの時代に、アートは現代を映す鏡として、どうすれば社会に(他者に)が貢献できるかを考えて表現していくことも、アーティストの仕事の一つとも言えるだろう。

・制作意図

黒板に絵を描いてほしいと、稲城市黒板ジャック運営委員会から依頼を受けた。稲城市立稲城第四小学校の教室の19ヶ所の各黒板に、個人やグループで黒板にチョークで絵を描き、新学期に登校した児童をサプライズで迎える「黒板ジャック」というプロジェクトである。制作期間は、2014年8月28日～31日の4日間であり、9月1日が新学期初日である。私は4年1組のスライド式の黒板に一人で担当することになった。

小学校という場で、鑑賞者が特定されており、また黒板にチョークで描くという、消して残らない一時的な絵画制作というのは、私にとって初の試みだった。美術館やギャラリーでもなく、商業施設でもないということで、自分を表現することや、商品として成立する作品にさせなければならないなどの様々なしがらみから解かれ、単純に小学校の子どもたちに向けて絵を描くことに専念することができた。わたしは、そこで出会う子どもたちに、上手い絵を見せて驚かせたいのではなく、絵を通して何かを伝えたいと思った。

そこで、小学生の気持ちを考え始めた。ふと思い出したのが、自身が小学生の時に「オオバコは踏まれて強くなる」ということを国語の教科書を通して学び、それが大人になってからも心の中に残っていた。そして、オオバコの生態を自分に置き換えて、強く生きることの意義について考えることが度々あった。

この経験を踏まえ、直感的に思いついたテーマは、「根っこが木を支えている」ということだ。その意図は、幹や枝がどれほど立派で、葉っぱがどれほど綺麗かと、見えるところを気にしてしまうが、根っこがなければ、強風や、嵐が来た時に木は耐えられなくなってしまう。見えない根を成長させることの大切さを絵で表現したいと思った。

考えを整理していくうちに、「根っこが木を支えている」という思想は、自分の今までの作品を貫いているコンセプトと類似していることに気がついた。特に、2003年(当時大学1年生、19才の時)に作った「PREZENT」(プレゼント) a という作品は、見えるところだけを大切にしている様を視覚化して、見えないところの大切さのコンセプトを逆説的に用いて表現した。

A. 「PREZENT」(プレゼント) という作品名

プレゼントの語源には諸説があるが、その一つとして、「presence」=「存在」という言葉が基になっているという説がある。つまり、「あ



図1 a.2003年「PREZENT」1600×1000×1200 ミクストメディア
2007年ミズマアクション「眼差しと好奇心 vol.2」(表参道・ギャラリーエス)の展覧会に出品するために再制作したもの。高橋コレクション所蔵(精神科医・高橋龍太郎のアートコレクション)

なたを想う人間が存在している」、そして「自分の存在を相手に伝える」という意味が込められている。

ある意味、プレゼントは「自分」を相手にあげることであるともいえる。物をプレゼントするだけではなく、言葉をプレゼントすることもあるし、時間をプレゼントすることもある。プレゼントは相手のために与えるもので、プレゼントによって、人間関係が築かれ、信頼関係にもつながる。かたちのあるものにしても、かたちのないものにしても、プレゼントを通して、自分の存在を相手に伝える。

B. リボン

しかし、この作品のプレゼントには大きなリボンがあり、それが重しとなって箱を容易に開

けることはできない。プレゼントの箱がリボンによって縛られていることは、本心を閉じ込めることである。断固として、箱を開封することを拒否している。リボンが崩れるのが嫌で、中身を見られるのが嫌で、固く自己を封じ込む。この作品を言い換えると、自分の存在を「装飾」に託してしまった、希薄な現代人の人間関係を表現した。自分を人形のモデルとして使用しているということは、このような人間関係を自分自身も築いていると思うからである。本心を見せることによって傷つきたくないという繊細な心をもった現代人の人間関係を映し出した。

C. 人形

プレゼントのリボンの中の二つの向かい合わせに寝ている人形の顔や手は、自分をライフマ

スクとして型を取って鋳造した。そのため、等身大と全く同じ大きさとなっている。そこに、化粧するようにアクリル絵の具で着彩し、髪の毛やまつ毛をつけた。そして、ホクロやしわなどできるだけリアルに作り、本物の人間が寝ているかのように作り見せている。

その二体の同じ容姿をした人間が化粧され寝ている意図は、美化され、増幅された「わたしの気持ち」を表している。19才の女子大生であった当時、いつの間にか、自分本来はどういう人であるか、心はどうなのかよりも、相手の目にどう映るのかに注意を払うようになった。見えない部分を美しくするよりも、見える部分を美しくすることに重心が傾いた。

真っ白いプレゼントの箱の中身よりも、目に付く飾りである真っ赤な大きいリボンをごージャスにする。プレゼントは中身ではなく、ラッピングであるそのリボンがいかに美しいかで価値が決まるのである。中身は見えないのだから、表層を華やかに装い「自分」をいかに美化させるかが重要である。このような概念を作品を通して、「根っこが木を支えている」見えないところが大切であるというコンセプトを逆説的に用いて視覚化した。

・ 黒板の絵について

「根っこが木を支えている」というコンセプトを絵で表現するにあたり、前文で述べたように、鑑賞者は小学生と特定されている。また、黒板にチョークで描くため、その絵は消して残らないものである。そこで、その絵は一時的であっても、その絵を見た児童の心の中に、大人になっても消えないことを目指した。つまり、黒板ではなく「心の中に描く」ことを意図した。

A. 構図

4年2組の教室にある黒板に初めて触れ、エスキースに取りかかった。想像以上に横幅が広い黒板であったため、高さが描ききれず、木全体像ではなく、中心部分を描く構図にした。そ

の木の高さや根の深さは鑑賞者に想像に任すことにした。

また、地上の木と地面の根が同じ大きさになることで、見えない根が木に負けていないことを表した。

B. 描き方

通常絵を描く時に、陰影を出すために、ぼかしは有効な技法であるのだが、今回は、ぼかし技法を全く用いなかった。木の生命力の力強さを表現するために、一つ一つの線に力をいれ、筆圧濃く描写した。

葉っぱ一枚一枚は黄色と緑のチョークをを用い、幹は茶色で表面の木目を描き、白で光を入れていった。深緑の黒板の地の色を残すことによって、陰影をだし、絵に立体感を与えた。

背景は、上から白 水色 紫 桃色 黄色と、すべてのタッチが横線で統一しグラデーションに仕上げた。

そして、風を表現するために、葉が散っている様子を描いた。また、木の中にリスを描いて小さな生命を絵の中に動きを感じさせることをねらった。

このように、黒板消しを使わず、一度の線で決まるように、強いタッチで描いていったため、他の人が描いた黒板の絵に比べて、発色が一段と鮮やかになった。全部で8色のチョークを使用して完成させたが、チョークがここまで、発色が出すことができるとは、私自身も知らず驚きであった。

C. 仕掛け

今回スライド式の黒板は、自らリクエストした。後から知ったことであるが、19ある黒板のうち2つだけがスライド式であった。スライド式であるため、通常の黒板のほぼ倍の大きさがある。そのため、黒板全面に描いただけでも、大きさのゆえにインパクトは強くなる。

スライド式をリクエストした理由は、ただ絵

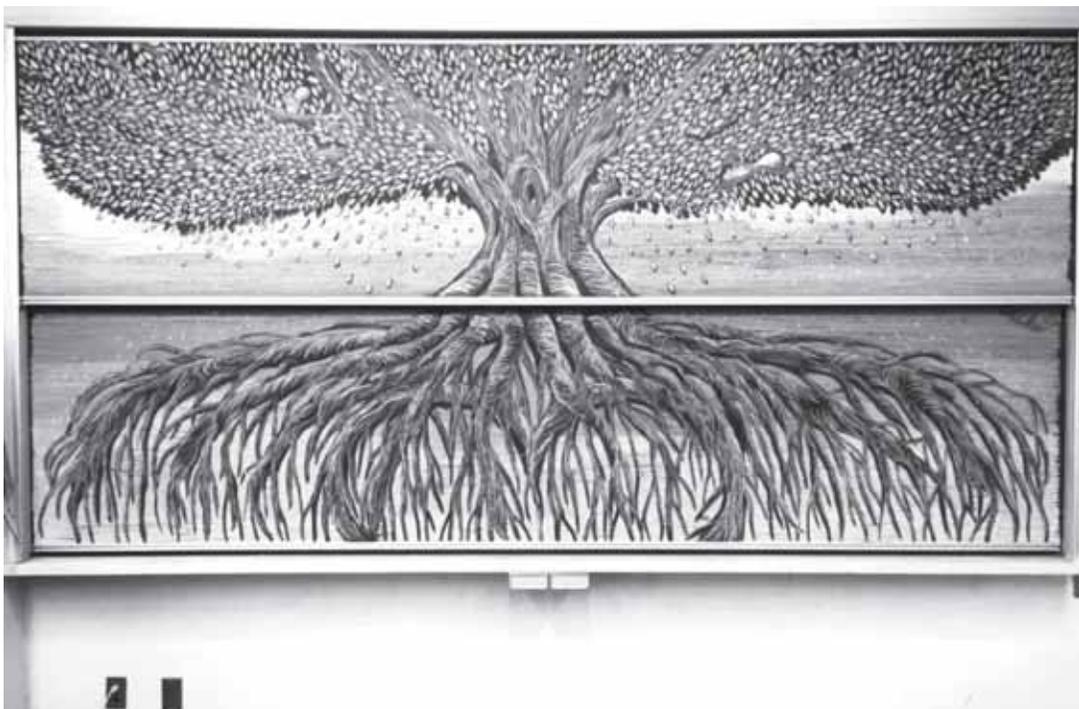


图 2

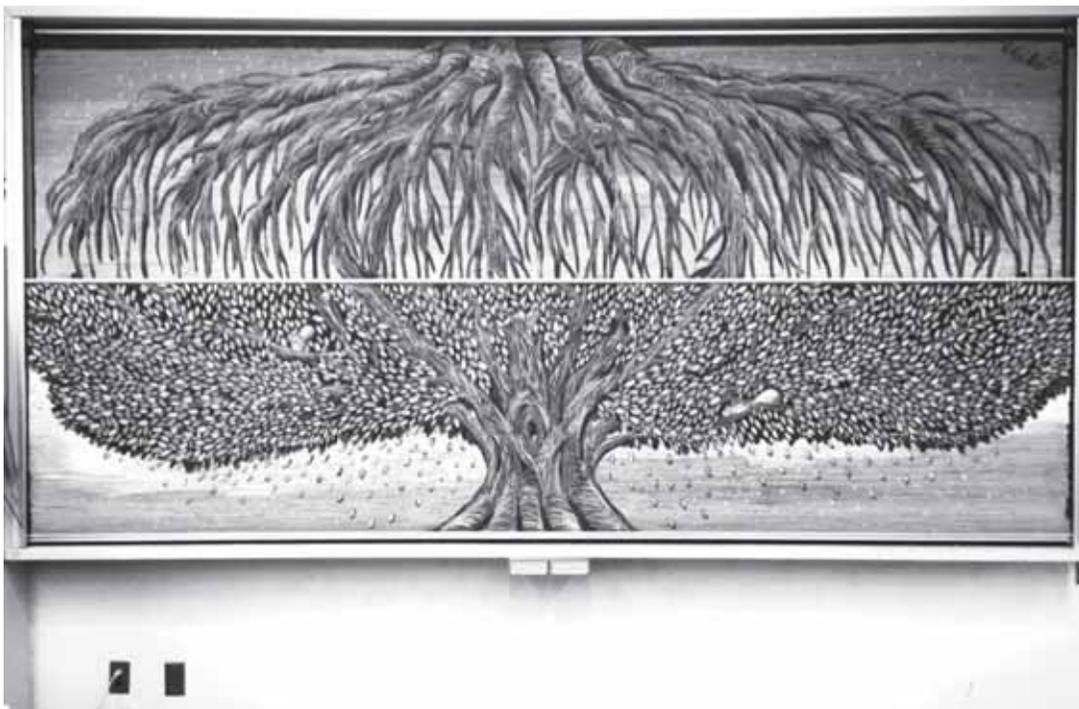


图 3

を鑑賞するだけではなく、絵を動かしたら面白いのではないかという考えがあったからだ。動かすことによって、何かストーリーやそこに意味が生まれてくることを期待した。しかし、現場に行くまではその詳細の仕掛けを考えず、現場に行き行って描いてみた時の、その場のインスピレーションを大切にすることにした。

そして、その場で描き始めた時に、構図を決める段階で、何度か黒板をスライドさせて上下を反転させていくうちに、木の幹と木の根が繋がっていることに着目し、それを反転させた時に繋がっているように描きたいと思った。

根と幹の境は曖昧であるため、スライドすることによって、木と根が天地が逆転し、幹と根が繋がり、「ハート型」が隠れているという仕掛けをつくった。その意図は、根っこと木の優先順位を逆転してこの絵が完成する。つまり、「根っこが木を支えている」＝「見えない根っこが大切である」ということを表現した。

このように、児童が実際に絵に触れて、参加できる仕掛けを作ることによって、動かして、何が見えるのか探し、発見するという一連の体験を通して、彼らの心の中に、ただ見るという行為よりも、少しでも強くその木と根っこが描き込まれることをねらいとした。

子どもと絵

9月1日、長かった夏休みが明け、初日の登校日である朝に、子どもたちはいつもと違う黒板を見て、驚いて叫ぶというよりは、戸惑いや困惑している様子であった。まだ目が覚めていないような寝ぼけた頭の中、久しぶりに会う友達に、いつもと違う教室で、多くの刺激をどのように受け入れていったらよいかわからないという、困惑であったのだろうと小学校の教員たちは述べていた。

体育館での全校児童の始業式を終え、少しずつ目が慣れていく中で、公開授業が始まった。

私は、この公開授業で、4年1組の子どもた

ちに、初めて顔と顔を会わす事ができた。初めてであるのだが、それまでの制作期間の4日間、まだ会ったことがない子どもたちのこと思い巡らして制作していたため、初めて子どもたちを目の前にしたときに、すでに私の中に子どもたちへの愛情のような感覚があることを感じた。公開授業で、子どもたちに対面できた嬉しい感情を持って、この作品に対する思いを言葉を通して伝えた。

公開授業の後、全学年の子どもたちも、自由に19ヶ所すべての教室の作品を鑑賞し、その作品の中から一つの作品を選び、感想文を書いていた。

ドアの外から覗く子どもや、一目見て驚きの声をあげる子や、ゆっくり、ゆっくりと友達と近寄る子ども、近くまで来て凝視する子どもなど、様々であった。

「根っこのところ」についての感想は、4年1組の24人と57人の他のクラス（1年生～6年生）の児童からの感想、計81名が集まった。

「木がとっても大きくて、色合いがよくて、木の上から下までとともうまく、背けいもよくて、本物をみているような木で、全部私の心にのこった、立体的ないい作品でした。」（4年生女子）

「わたしはさいしょハートがみえなかったけど、友だちにヒントをおしえてもらったから、すぐに分かってとともすごなと思いました。わたしも、そういうアートの絵をかいてみたいと思いました。...」（3年女子）

「木の絵が書いてあっていろんなくさや、葉っぱなどいろがにじ色みたいにキラキラでかがやいて見えました。...」（3年女子）

「第一印象として、とても色あざやかだと感じました。木の根の一つ一つ、木の葉の一つ一つをていねいにしあげていて、これぞ芸術です。」（6年男子）

「木と根っこだと思ってみていたのに、黒板の上と下を逆にすると、ハートの形が出てきて、おどろいた。葉っぱが一つ一つ細か



图 4

くかかれています、すごいと思った。」(6年男子)

「大きい木は、大きいイメージを持ってという事が分かりました。」(6年男子)

「木の根には、いろいろな思いがこめられてあり、わたしは4年1組の黒板の絵が一番気持ちがこめられて、一番すてきだと思いました。上と下をぎやくにして出来る「ハート」の形は、いろいろな気持ちにつながっていると思いました。(4年生女子)

まとめ

子どもの心の中に絵を描くことについての試みとして、作者が心を込めること、そして子どもたちの心の中に描きこもうとする気持ちは欠かせない要素の一つであると思う。

この教室にどのような子どもたちがいて、どのような事を考えていて、どのような悩みを抱えているのだろうかと考えながら制作してきた。それはまるで、絵にチョークで感情を吹き込むようであり、また子どもたちの心の中に描きこむな作業であったと感じる。

また二つ目に、絵を鑑賞するだけではなく、

子どもが実際に絵に触れて、参加できる仕掛けを作ったことによって、動かして、何が見えるのか探し、発見するという一連の体験することができる。それは、彼らの心の中に、ただ見ることは得られない感動を与えることができた。その感動を通して、その木とその根っこが強く印象に残り、心の中にそれを映し込み、子どもたちの心の中に絵が描き込まれることにつながるのではないだろうか。

参考文献

- 1) オノ・ヨーコ(2016),「YOKO ONO FROM MY WINDOW」松井みどり,美術手帳 201601p174
- 2) 原田マハ 高橋瑞木(2014)「すべてのドアは、入り口である。現代アートに親しむための6つのアクセス」祥伝社
- 3) 上野浩道(2007)「美術の地から教育のかたちー表現と自己形成の哲学ー」春秋社
- 4) 坪谷ニューエル郁子(2014)「世界で生きるチカラ」ダイヤモンド社